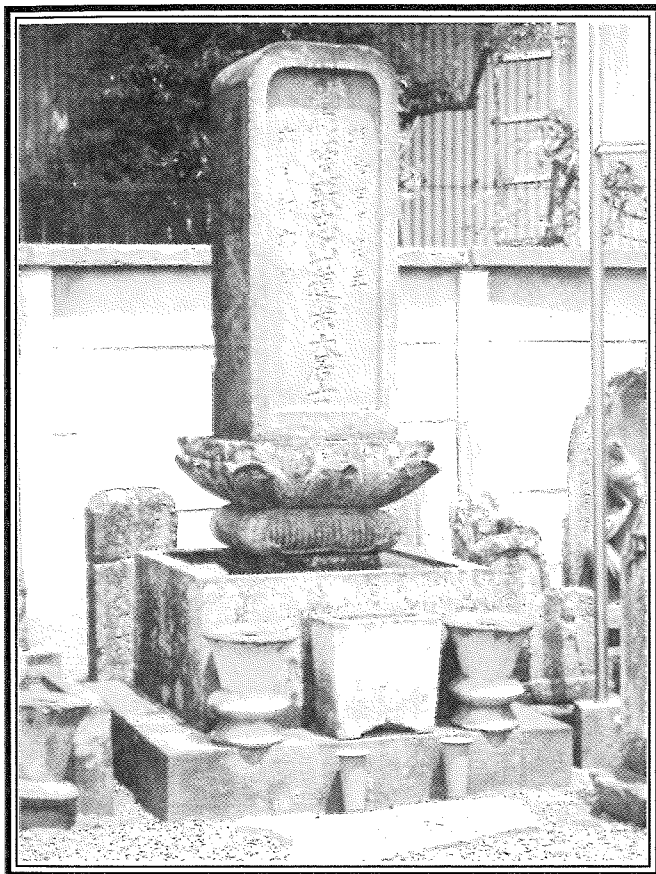


あるむぜお84

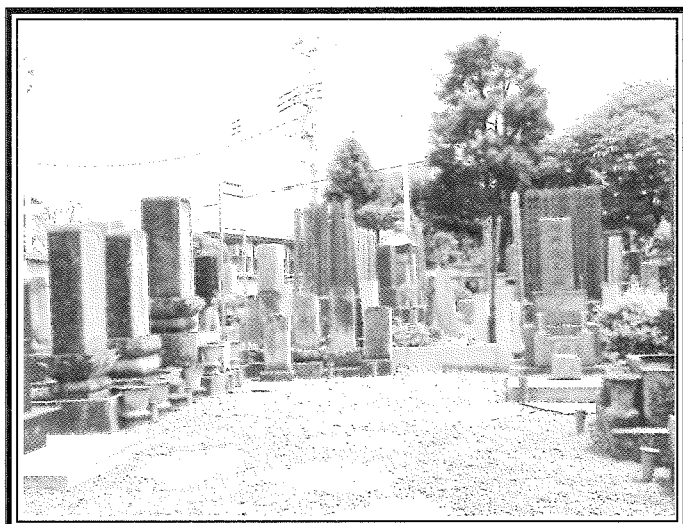
府中市郷土の森博物館だより

al museo NO. 84

2008年6月20日



左：龍光寺墓地川崎平右衛門墓
下：川崎家墓地遠景



目次

- 1-2 シリーズ川崎平右衛門定孝の墓めぐり
①府中市押立町龍光寺
- 3-4 展示会案内
特別展 発掘！府中の遺跡2008
テーマ展46 府中市の念仏講
- 5 最近の発掘調査
市史跡武蔵国衙跡の保存整備と公開
- 6-7 ノート 江戸時代に掘り出された銭
- 8 新米学芸員の交換日記
- 9 平成19年度資料受入、利用状況報告
- 10 展示室リニューアルトピックス ㊦

府中市郷土の森博物館では、2009年1月24日(土)から川崎平右衛門をテーマに特別展を開催いたします。これに先がけて本号より表紙のシリーズを4回連続で、平右衛門の墓について紹介します。

国内各地において数か所確認されている供養墓の話題を通じて、平右衛門がどのような人物だったのかを想像してください。



川崎平右衛門定孝の墓めぐり

①府中市押立町 龍光寺

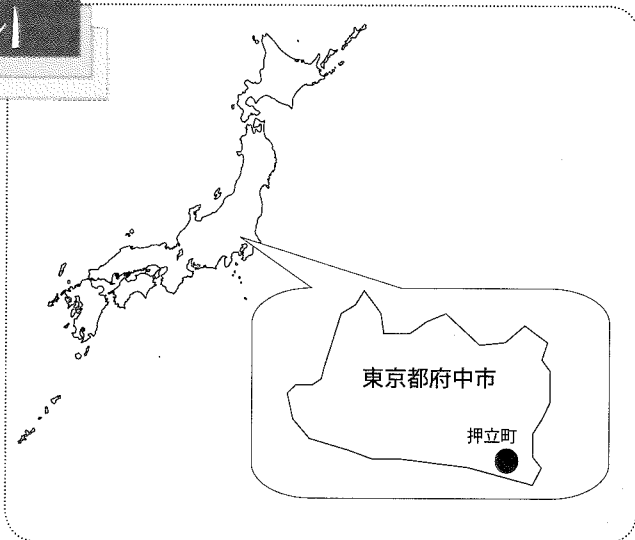
私たちがよく目にしている石塔による個人墓が庶民にまで広まったのは江戸時代からといいますが、亡くなった人を供養したい、その人の菩提を弔いたいという思いが位牌や墓石の形をとらせたのです。その思いを持つ人があちこちにいれば、複数の墓が残る場合もあります。遺体や遺骨を埋納しなくとも、供養のために石塔を建てることも行われました。両者の区別は、厳密にはつけ難い例も多数あります。

川崎平右衛門定孝は、明和4年(1767)6月6日数え年74歳で逝去しましたが、この時代に府中押立で生を受けた人物として、大変興味深い生涯を送ったといえましょう。

村や地域のリーダーとしての資質を、徳川8代将軍吉宗の下、大岡越前守忠相に見込まれ、それを武蔵野新田の開発・経営に生かし、農民から幕府代官(旗本)に転身するという稀有な経験をしました。その後の赴任地は美濃国本田代官所、石見国大森代官所です。この間の出来事を伝記風に記しているのは、彼の手代を勤めていた同郷の高木三郎兵衛が残した『御代官川崎平右衛門発起書』(『高翁家禄』)のみです。

定孝にはこれまで分っている限りでは7か所の供養墓があります。この他、神として祀られた場所も6か所あり、その中には、近年になって作られたものもあります。この中の主な所を、今号から4回にわたってご紹介しようと思います。まずは生まれ故郷にある墓を訪ねましょう。ここは、寛政年間(1800年前後)に幕府に提出された幕臣各家の系図集『寛政重修諸家譜』の定孝の項に「押立村の龍光寺に葬る」と記述されている所です。龍光寺は彼の生家のすぐ東に位置します。江戸時代を通じて押立の川崎家の檀那寺は府中片町の高安寺でしたので、ここは墓寺というべきでしょう。

定孝は幕府の仕事をするようになると、江戸に屋敷地も受け、別家を建てた形になりましたの



で、生家は自分の末弟(平蔵弘昌)を養子にして次代を継がせました。ですから、定孝以後、この墓地に葬られているのは平蔵の家系です。

龍光寺は堂宇の北側が墓地になっていますが、一番奥まった大きな区画が川崎家の墓所です。東側は平蔵以降の川崎本家、西側は平蔵の二男で、若い頃金十郎と名乗り、定孝に従って石見まで行った平左衛門昌睦が初代となる分家の墓地です。さて定孝の墓ですが、正面は「靈松院殿忠山道栄大居士」の法名、右側面に「川崎氏」、左側面には大正8年(1919)に従五位下を追贈された折の追刻がある個人墓です。墓域の中ではひときわ目立つ大きさです。高安寺で見せていただいた過去帳には、法名の大という字は右側に別手で書き入れられていました。記録は見つかっていませんが、後に居士から大居士にされたのではないかと推測できます。

彼の墓のすぐ左には、いつの時代かに改葬されたのでしょう、押立川崎家の初めの頃の3組の夫婦が一つの石塔に納められています。さらにその左側には明和6年(1769)に亡くなった弘昌の嫡男、定孝にとっては甥(平兵衛)の墓が並んでいます。そして、平兵衛の墓の斜め後に定孝より4年前に亡くなった妻の墓があります。その意匠は夫のよりはるかに大分あっさりと感じられます。この石塔はおそらく定孝が立てたものだろうと思うと、虚飾の無いあるいは実質的な人物像が浮かんできました。

因みに、高木三郎兵衛の眠る高木家の墓地は、川崎家墓地と細い道を隔てたすぐ北側です。

(馬場治子)

特別展 発掘！府中の遺跡

発掘された 戦争の記憶 & 調査速報

7/19 (土) ~ 8/31 (日)



発掘調査中の掩体壕
敵機の爆撃から守るため、この中に戦闘機が隠された。

調布飛行場に程近い市内白系台には、奇妙な鉄筋コンクリート製の建造物が残されています。太平洋戦争の末期に、戦闘機・飛燕を格納するために建造された掩体壕—エンタイゴウです。

考古学というと、古い時代の遺跡を発掘する学問と思いがちです。しかし遺跡は、文字のない古い時代のものばかりではありません。大地には、江戸時代や明治時代、そして太平洋戦争中の人びとが刻み込み、残したものもあるのです。

もっとも、こうした新しい時代の遺跡がきちんと発掘調査されるようになったのは最近のこと。とくに、太平洋戦争中の遺跡は近年になって考古学の調査・研究の対象としてクローズアップされてきたといっただいでしょう。戦争の記憶が薄れつつあることも、こうした調査と研究をあと押ししているようです。文字による記録や言葉による伝承とともに、当時の様子を知ろうえでの重要な資料として認識が高まってきているのです。

さて、府中市ではこの掩体壕の保存を決め、発掘をはじめとする調査を実施したところ。将来の活用に向けて、整備のための基礎的な情報が整ったといえるでしょう。

しかし、発掘された太平洋戦争の記憶は、この掩体壕ばかりではありません。府中市は武蔵

国府に関連する古代の遺跡や原始の遺跡が広い範囲にあって、数多くの発掘を行っています。こうした遺跡の調査でも、防空壕や銃弾、金属製品の代用としてつくられた陶製の釜、終戦に際して埋められた鉄砲など、戦時下の様子を具体的に物語る遺構や遺物が見つかっているのです。

また、市域東部にある調布飛行場は、敵機を迎え撃つ戦闘機の発進基地であり、首都東京の防衛拠点でした。このため、今回保存が決まった掩体壕のほかにも、調布飛行場をとりまく府中・調布・三鷹市域には多様な戦時下の遺跡が残されているのです。そして時には、忘れられた一埋もれた記憶—が、発掘によってよみがえることもあるのです。

これまで戦時下の様子は、残された品々、記録、伝承などから語られることがほとんどでした。今回の展示では、遺跡や遺物から戦争の記憶をたどって見たいと思います。毎年開催している「発掘！府中の遺跡」の一環だから、遺跡と遺物にこだわらざるを得なかったのですが、残された品々、記録、伝承などから語られるのとは違った一面が見えてくるのではないかと思います。

あわせて、昨年度に市域で実施された発掘調査を中心に、最近の主要な調査成果を紹介します。

(深澤 靖幸)

展示会案内

テーマ展 45

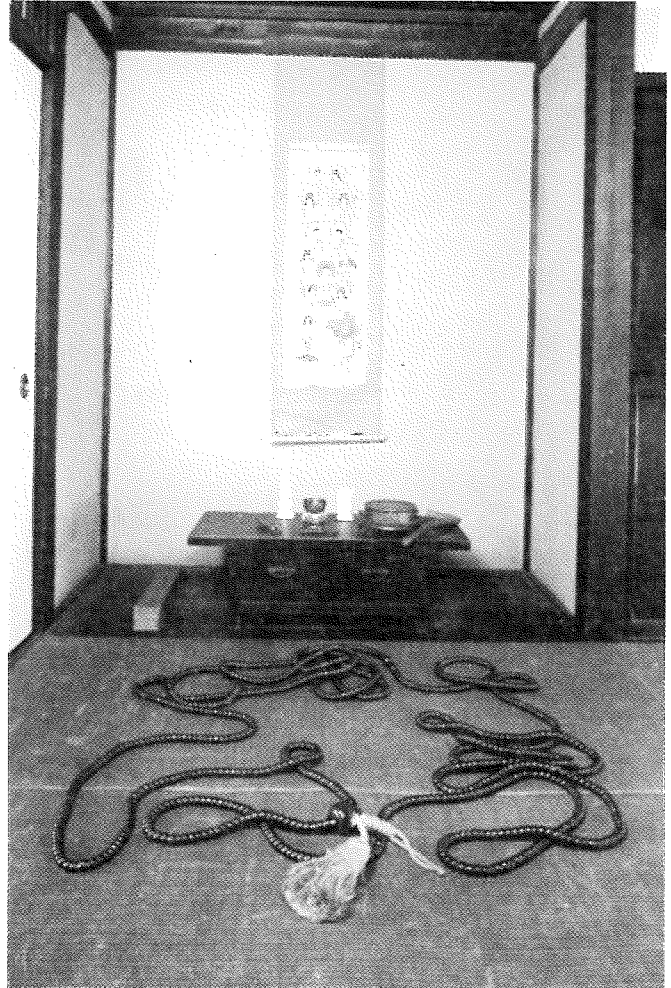
府中市の念仏講

～人を送る、つどう～

5月24日（土）

～10月19日（日）

会場：本館 2 階常設展示室内



当館所蔵の念仏講道具（旧新宿で使用）

お葬式や法事などの際、人々が集り行った行事のひとつに「念仏講」があります。

この行事はご婦人を中心に人々が集まり、車座になって大きな数珠を回しながら、「南無阿弥陀仏」といった念仏や唱えごとをする事です。唱えごとのリズムをとるために鉦をたたいたり、何回唱えたか分かるようにするため木札などの道具一式を、近所の組織ごとに保管していました。14、5軒で1単位となってこれまで近所、親戚として交流してきた人を送ったり、生前を偲んで集う場にもなっていました。

本尊の掛け軸、用具を保存したり台として使用する机、使用した記録をとるための帳簿、直径1メートルはある数珠、などがあわせて伝えられている場合が多いようです。

念仏講に参加する人々は冠婚葬祭を共同でとり行っていた組織でもありました。そのため、結婚式や葬式を行う際手助けをしたり、1961年（昭

和36）に禁止になるまでは土葬が多かったため、葬儀の後、墓穴を掘る役割を担っていた組織でもあったのです。これら行事の場は葬儀・供養の意味とともに、文化を伝承する場でもありました。

火葬が主流になり、式も専門業者に委託することが多くなった現在では、念仏講組織は相互の助け合いとしての役割も少なくなっています。念仏講自体も行われることが少なくなったため、博物館では多くの地区から念仏講道具の寄贈を受けています。

そこで今回の展示では、市内から寄贈された念仏講の道具類を通して府中の文化を考えてみようと思います。

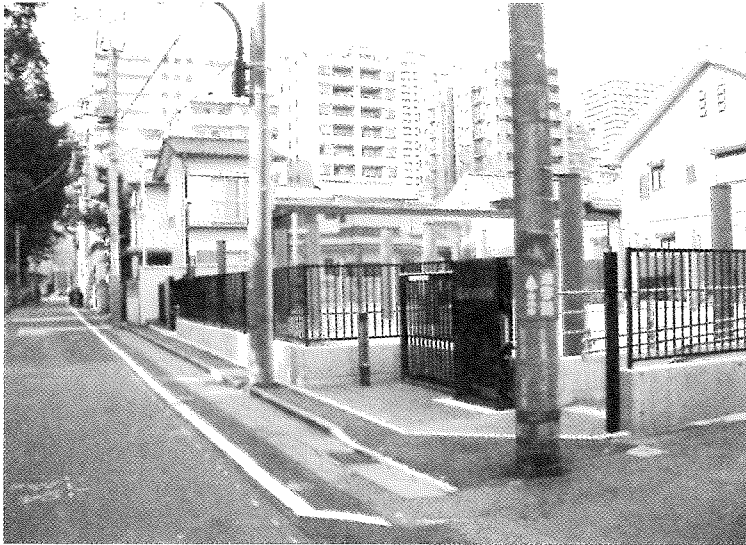
なお、これまで主としてテーマ展は常設展示室出口のテーマ展コーナーで行ってききましたが、常設展示室リニューアル工事の関係から、新規完成した「くらやみ祭コーナー」を出てすぐのコーナーを使用しての開催となります。（佐藤智敬）

最近の発掘調査

市史跡武蔵国衙跡の

保存整備と公開

府中市文化振興課 荒井 健治



オープンした市史跡武蔵国衙跡

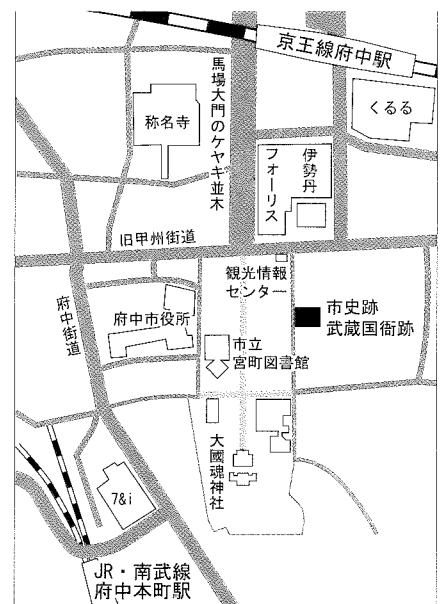
4月6日から、宮町2丁目の市史跡武蔵国衙跡の保存整備が完成し、一般公開が始まりました。史跡指定地からは、発掘調査で市内最大級の掘立柱建物跡2棟が南北に並んで見つかったため、保存整備事業は、この建物の柱の復元をテーマとして行いました。

2棟の建物跡は、武蔵国衙（今から1,300年～1,000年前の都道府県庁のような役所）のなかでも、特に重要な役割を持っていたものと考えられます。本物の遺構を盛土で覆って保護した上に、当時の建物の柱穴の真上に柱を復元しました。柱の赤い色は、実際に市内から発掘された瓦に付着して残っていた塗料（酸化鉄を精製した「丹土」）を再現した、こだわりの色です。

史跡の整備では、このほかにもさまざまな工夫をしています。例えば、当時、建物が存在した範囲には黒いタイルを敷き詰め、建物と建物との間の空間部分は、黄色い舗装材を使い、その違いを表現しました。小石を敷いた部分は、屋根の軒先の位置にあたり、雨水が滴り落ちた場所を意味しています。更に、最大の見せ場とも言うべき仕掛けが遺構展示館です。この建物は、館内に柱穴の構造や設置の方法を説明する模型があり、外側正面にはマジックミラーが設置されています。南側の黒いタイルと黄色い舗装の境目に立って、展示館の方を見ると、マジックミラーに柱が映りこんで、北側の建物の規模を感じることができます。

なお、この保存整備工事と平行して、北側の建物跡の規模を明らかにするため、西側の道路部分で発掘調査を実施しました。その結果、北側の建物跡は、西側の道路部分にも延び、南側建物より大きく、廂もついた立派な建物だったことを確認しました。この結果を受けて、西側の道路も史跡隣接地にふさわしい整備を行うよう、検討を始めました。

府中市では市民の多大な協力を得て、武蔵国府跡の発掘調査を積み重ねてきました。そしてこの度ようやく、1,300年前の国府の姿を皆様にご体感いただける施設をオープンできました。厚くお礼申し上げますとともに、今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。

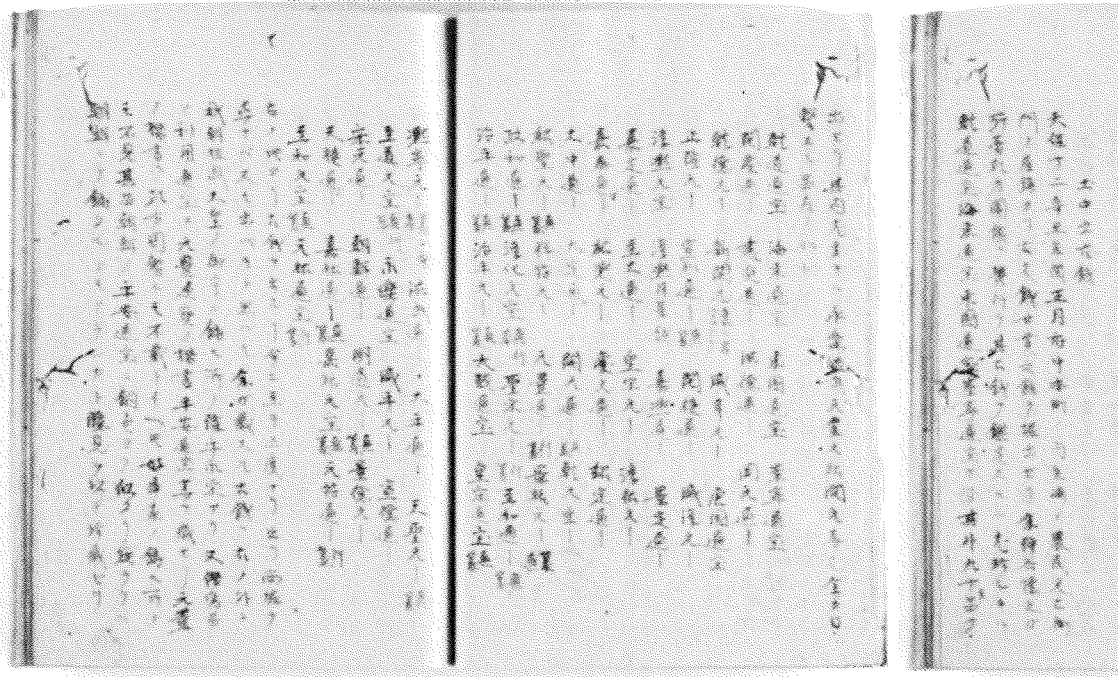


市史跡武蔵国衙跡のご案内

- 場所 府中市宮町2丁目5番地
- 開館日時 年中無休（年末年始を除く）
午前9時から午後5時まで
- 入場無料
- 交通 京王線府中駅徒歩5分／JR南武線・武蔵野線府中本町駅徒歩5分
- 駐車場・駐輪場はありません。

江戸時代に掘り出された銭

中世大量埋納銭の記録



先日、S学芸員が1冊の和綴じ本を開いて見せてくれた。「土中出古銭」の見出しがあり、ページをめくると、たくさんの古銭の名が列記されているのではないが。

府中本町で、江戸時代の後期に、総数20貫文つまり2万枚もの古銭が出土した記録であった。銭名を一瞥すると、中国などでおもに10～15世紀に発行された、いわゆる渡来銭である。そして、江戸時代に発行された寛永通宝の名がないことからすると、中世に埋められたものと判断できた。中世は、何千、何万という大量の銭を地中に埋めることが流行した。全国で280か所以上で渡来銭を主体とする銅銭が掘り出されているのだ。府中でも、これまでに3か所で発掘調査されている。1991年に3,890枚、98年に15万453枚、2000年に3万7,421枚、いずれも宮西町1丁目地内で、3箇所合計は19万枚にも達する。全国的に見ても、これほど狭いエリアから、しかもこれほど大量の古銭が出土した例はほとんどない。

さらに、同じ宮西町1丁目では、推定5万6,000枚が1932年に見つかったという新聞記事もある。

渡来銭の大量出土は、中世の府中まちの経済的な豊かさを教えてくれる。

「土中出古銭」の記事は、こうした大量出土に貴重な一例を加えることとなった。

さて、この記録は『懐安随筆』と表題の付けられた和綴じ本の一節である。2005年に府中市住吉町の内藤治家より寄託され、後に寄贈された膨大な量の書籍と古文書の中から見出されたもので、懐安と号した内藤重鎮による、古記録類の筆写と随筆を収めた冊子である。内藤治家はかつて小野宮と呼ばれた地域の旧家で、重鎮の祖父・重喬は^{おおの しよくさんじん}大田蜀山人などとも交流があった。こうした家柄の当主だからこそ、直線距離にして約1.5km離れた集落での古銭の出土を記録してくれたのだろう。

「土中出古銭」の記述をたどりながら、少しかり考察を加えてみよう。

古銭は^{てんぽう}天保12年(1841)閏正月、府中本町の矢崎の農民、又右衛門の屋敷より掘り出され、その枚数は2万枚であったという。重鎮は、これを鑑

定し、90余の銭種を確認、61の銭名を記録する。

鑑定には考証学者・狩谷椽斎が著した古銭の概説書を用い、銭名の書体や背面の文字をも記録している。さらに、珍しいもの、多い銭名もあげている。注目に値する着眼点である。

さて、古銭は発行された年（初鑄年）がはっきりしているから、銭が大量に出土した場合、およその埋められた年代を知ることができる。府中市内の発掘調査で見つかった3地点では、15世紀半ばから後半に埋められた可能性が高い。今回の矢崎出土銭では、中国歴代の王朝のほか、朝鮮や安南（ベトナム）で発行された銭も混じっていて、このうち最も新しいのは安南で発行された1470年初鑄の洪徳通宝であった。つまりここでは、1470年以降に埋められたと判断できるのである。

また、洪徳通宝を最新とする大量出土の銭は、福井県一乗谷遺跡の朝倉氏居館内の井戸底から見つかっていて、1573年の信長・家康連合軍による越前攻略に際して投棄されたものと考えられている。したがって、矢崎出土銭は1470年から1500年代後半の間に埋められたものと推測してよいだろう。このように埋められた年代を推測できるのは、銭名を記録してくれたお陰である。

次に出土地にも注意したい。これまでの出土地点は宮西町や宮町といった府中の中心部だが、矢崎は府中の中心部から多摩川を渡る街道が貫通する集落であり、距離を隔てているのである。その上、重鎮は、矢崎より古銭が掘り出されたのは3度目だとも述べている。このことから、矢崎における集落の成立が中世にさかのぼることは確実であろう。そして府中の外縁の交通集落として発達していたことも、十分に推測してよいだろう。このように「土中出古銭」の記述は、単なる出土記録の域を超えた情報を提供してくれるのである。

それにしても残念なのは、古銭の行方がわからないことだ。そして又右衛門の屋敷の位置が特定できないのも同様である。しかし古銭の行方も屋敷の位置も、古文書の整理や解読が進めば、明らかになる可能性が残されている。また、内藤治家資料の整理はボランティアの協力を得て今も続いており、そこから新たな情報が得られることにも期待している。

銭名	王朝	初鑄年	備考
開元通宝	中国・唐	621	多
乾元重宝	中国・唐	758	
乾徳元宝	中国・前蜀	919	
周元通宝（周通元宝）	（中国・後周）	（955）	
唐国通宝	中国・南唐	955	
大平通宝（太平通宝）	（中国・北宋）	（960）	
宋元通宝（宋通元宝）	（中国・北宋）	（960）	
淳化元宝	中国・北宋	990	
至道元宝	中国・北宋	995	
咸平元宝	中国・北宋	998	
景德元宝	中国・北宋	1004	
祥符元宝	中国・北宋	1009	
天禧通宝	中国・北宋	1017	
天聖元宝	中国・北宋	1023	
明道元宝	中国・北宋	1032	
景祐元宝	中国・北宋	1034	
皇宋通宝	中国・北宋	1038	
至和通宝	中国・北宋	1054	
至和元宝	中国・北宋	1054	
嘉祐通宝	中国・北宋	1056	
嘉祐元宝	中国・北宋	1056	
治平通宝	中国・北宋	1064	
治平元宝	中国・北宋	1064	
熙寧元宝	中国・北宋	1068	
元豊通宝	中国・北宋	1078	多
元祐通宝	中国・北宋	1086	多
紹聖元宝	中国・北宋	1094	
海東通宝	朝鮮・高麗	1097	珍
東国通宝	朝鮮・高麗	1097	珍
元符通宝	中国・北宋	1098	
聖宋元宝	中国・北宋	1101	
崇寧通宝	中国・北宋	1102	珍
大觀通宝	中国・北宋	1107	
政和通宝	中国・北宋	1111	
宣和通宝	中国・北宋	1119	
建炎通宝	中国・南宋	1127	
正隆元宝	中国・金	1157	
乾道通宝	中国・南宋	1165	珍
淳熙元宝	中国・南宋	1174	
大定通宝	中国・金	1178	
紹熙元宝	中国・南宋	1190	
慶元通宝	中国・南宋	1195	
嘉泰通宝	中国・南宋	1201	
開禧通宝	中国・南宋	1205	
嘉定通宝	中国・南宋	1208	
紹定通宝	中国・南宋	1228	
嘉熙通宝	中国・南宋	1237	
淳祐元宝	中国・南宋	1241	
皇宋元宝	中国・南宋	1253	
開慶通宝	中国・南宋	1259	
景定通宝（景定元宝）	（中国・南宋）	（1260）	
咸淳元宝	中国・南宋	1265	
至大通宝	中国・元	1310	
大中通宝	中国・明	1361	
洪武通宝	中国・明	1368	
永楽通宝	中国・明	1408	多
朝鮮通宝	朝鮮・李	1423	
宣徳通宝	中国・明	1433	多
洪徳通宝	安南・後黎	1470	
新開元宝	不明	不明	*
咸亨元宝	不明	不明	*

記録された銭名一覧

*は一致する銭がないもの。（ ）内は推定される銭名



from Tom to Hana

新米学芸員の

交換日記

①知ってました？八幡町今昔

Hさんへ。忙しい日が続いていますね。仕事にはもう慣れましたか？府中をしらべはじめて数年のぼくはまだまだ覚えることがたくさんあってたいへんです。

このあいだ博物館から自転車に乗って大國魂神社から国府八幡宮^{がいわい}界隈まで行きました。地形をみるためです。ぼくはいま、昔ながらのやりかたで米づくりをしてみよう！という体験学習を企画しています。その準備のなかで、「府中はハケ下は水が豊富だから水田稲作が多く、ハケ上は畑作中心」という情報をゲットしたからなんです。それで調べてみるとびっくりしました。いま「八幡町^{ほんちやう}」と読んでいるハケ上の地区、旧甲州街道に沿って大國魂神社にも近いあの場所でも、ちょっと昔には農業で暮らしていた人たちが結構いる、ということ！

そうこうしているうちに上のような絵をみつけました。これは是政に住む高木錠助さんという方が記憶をたよりに描いた大正～昭和10年頃の八幡町界隈です。記憶が原点なので照合作業は必要でしょうが、それにしても目立つ施設をのぞけば、今からでは想像もつかない風景と思いませんか？建物としては今でも残る国府八幡宮^{さくら}、鳩林荘^{りんそう}、そして「天地小沢精米所」(今でも宮町にありますね)、「八幡宿駐在所」^{てんち}、「西野屋製糸所」が見えます。競馬場に向う京王線のレールは、まだありません。家がぼつぼつとしかなく、ほとん



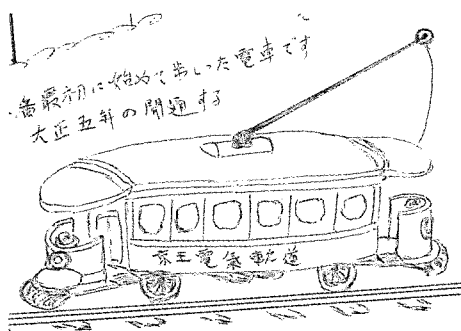
高木錠助氏画 大正～昭和10年頃の八幡宿

どの場所が畑だったみたいですね。

たしかに八幡町の家々から博物館(旧郷土館時代も含む)に寄贈されたもののなかには農具がたくさんあります。ということは農業を営んでいた方が多くいたんですね？だけど農具類は多くあっても、稲作に関するものは少なかったように思います。ということは情報どおり畑作が多かったってことです。八幡「宿」と呼ばれるくらいだから、街道ぞいの宿場町なのかとおもいきや、道具や絵図を見る限り、農村のイメージどおり。

道具や記憶をたよりに八幡町の昔を覗いてみました。歴史資料をたどると同様の結論になりますか？また、資料からはどの時代まで遡る事ができますか？わかる範囲で調べて教えてください。

ところで、高木さんの回想によると、京王電気軌道(現在の京王線)の「八幡前停車場」という無人駅があったといいます。今でいうとどのあたりのことかわかりますか？Hanaさんは鉄道のこ



高木さんの記憶する京王電気鉄道

とも調べていると聞きました。教えてください。うれしいです。

(Tom)

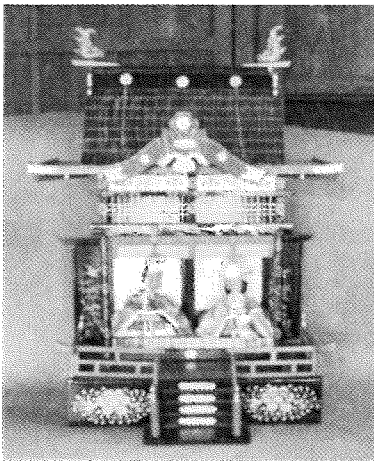
平成 19 年度
寄贈・寄託資料一覧



土佐源氏資料 (ポスター)



土佐源氏資料 (ポスター)



御殿雛

No.	寄贈・寄託者	資料名	分類	数量	受入
1	吉澤三郎	府中警察署舎落成記念徳利	民俗	1点	寄贈
2	福永満男	戦時貯蓄債券ほか	民俗	27点	寄贈
3	高橋昇二	八幡町例大祭関係記録	民俗	1式	寄贈
4	府中市消防団第7分団	消防団分団旗	民俗	5点	寄贈
5	林美津子	御殿びな	民俗	1式	寄贈
6	坂本長利	「土佐源氏」関係資料	民俗	1式	寄贈
7	番場自治会連合会	念仏講道具	民俗	1式	寄贈
8	芝辻 宏	ラジオほか	民俗	2点	寄贈
9	小林俊夫	除草機	民俗	1点	寄贈
10	後藤康雄	引戸式活字ケース	歴史	1式	寄贈
11	芝辻 宏	大國魂神社略誌	歴史	1点	寄贈
12	蘭之宮講中	蘭之宮関係古文書	歴史	3点	寄託
13	股部禮次郎	村野書・色紙、西脇順三郎原稿	村野四郎	3点	寄贈
14	村野晃一	雑誌『無限』	村野四郎	1点	寄贈
15	坂本正博	坂本正博著書(村野関係)	村野四郎	2点	寄贈
16	長島時子	大賀一郎名刺、絵ハガキ	大賀一郎	76冊	寄贈
17	阿部信勝	夕ヌキ剥製標本	自然	1点	寄贈
18	早川弘一	野鳥本剥製標本	自然	5点	寄贈

＊博物館の定期刊行物＊

本誌「あるむせお」は季刊発行の館報です。研究トピックや、最新の発掘情報、展示会の見所など、学芸員が交代で執筆する読み物が満載です。博物館と市内各所で無料配布しています。

また、博物館の様々な活動を年度ごとに報告する「年報」や、各分野の研究論文集「紀要」も有料で頒布しています。

平成 19 年度利用状況

区分		有料		減免	合計
		一般	団体	(障害者・4歳未満等)	
博物館観覧者 開館日数 309 日	大人	179,420	7,991	43,091	230,502
	子供	31,213	23,176	63,532	117,921
	小計	210,633	31,167	106,623	348,423
上記のうち ファミリー観覧者 投影日数 294 日	大人	31,184	2,378	4,241	37,803
	子供	13,349	11,635	5,242	30,226
	小計	44,533	14,013	9,483	68,029

★「あるむせお」は定期購読できます!★

「あるむせお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。4回分の送料320円(切手でも可)を添えて、受付カウンターでお申込みください。

⑨ 「こども歴史街道」構想

4月2日、ついに常設展示室リニューアル第1弾として、冒頭を飾る府中くらのやみ祭のコーナーがオープンしました。これを皮切りに次々と新たな展示更新が毎年進む予定ですが、今年度の目玉は「こども歴史街道」です。

見て、聞いて、参加する……最近の博物館では常に意識される基本的な考え方だと思います。本物の資料を目の前にして、ああこれがかの有名な○×△□なのかと感慨深げに見

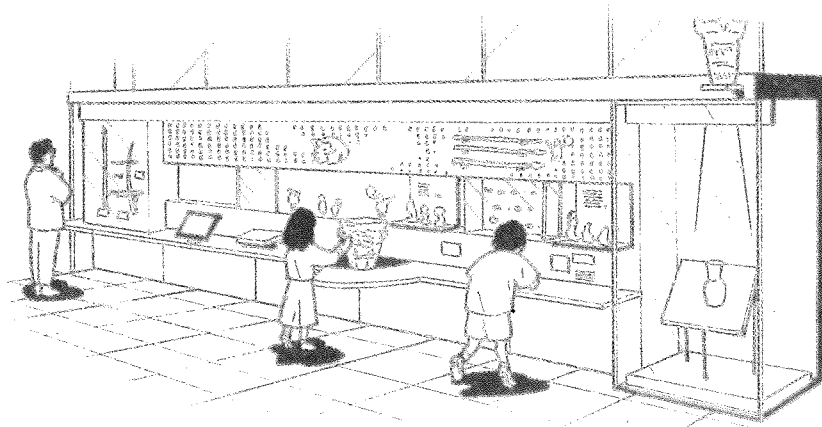
つめる来館者は意外と少ないように感じます。

古くは事前の下調査・予習をもって、その確認のために博物館で資料を見て学ぶのが定番の博物館利用法だったのですが、今の世の中、一般の人は博物館に来て初めて知る事柄がほとんどではないでしょうか。ですから、資料を展示してその説明文を傍らに置くだけでは、ピンポイントでその資料の何たるかは理解しても、歴史の流れに沿った中での位置付けまではわかりにくいものです。大人でも歴史に疎い人や興味の薄い人には同様に、ましてや子供なら尚のこと理解に苦しみます。あるいははなから避けられてしまうことも多々あるように感じます。

常設展リニューアル全体を通して、ひとつの目玉と考えられる「こども歴史街道」構想は、そんなビギナーズの目を向けさせるために練りに練られた展示手法であり、体感ゾーンとなるよう工夫された内容なのです。

時系列で構成されていた従来の常設展示コン

セプトは「くらのやみ祭」を冒頭に移したことで、必ずしも時の流れに沿ったものではなくなりました。よって府中の歴史を物語の如く順番に紹介するコンセプトは、形を変えて、よりわかりやすく楽しめる内容で場所も新たに設定し直すことになりました。



こども歴史街道・縄文時代部分のイメージスケッチ

ことになりました。本館オープンから20年、2階の常設展示リニューアルエリアでは、未使用となっていた壁面部分を再考し、斬新な発想で立案されてきました。壁面に

沿って巻物を右から左へ読んでいくように、府中の歴史が資料や模型とともに展開します。

府中周辺の台地成立と現在の地形を示す模型に始まり、そこから歴史が進行する過程を旧石器～縄文～古代～中世～近世の流れに沿って、それぞれの時代を象徴する資料や模型を使い、それらをパズル的に壁面にはめ込む形式で見せていきます。さしずめホンモノ図鑑を眺めながら楽しく理解することができるはず。ハンズオンもふんだんに取り入れ、実際に手にとって遊び感覚で時代を体感できるよう、各分野で工夫された趣向が数珠繋ぎの様相を呈します。最後は府中市の木・ケヤキを歴史的標本とともに象徴的に捉え、明るい未来を強く願う形でフィニッシュとなります。

工夫を凝らし、コンパクトにまとめられた府中の歴史街道は、いよいよ来春開通です。